

臨床福祉専門学校
言語聴覚療法学科 平成28年度 第一回教育課程編成委員会 議事録

日時：平成28年11月29日（月）13：00～14：30

場所：臨床福祉専門学校 202 教室

出席委員及び所属

田村 満子（NPO法人 こども発達療育研究所理事長）

園田 尚美（株式会社 言語生活サポートセンター 代表取締役）

内藤 明（言語聴覚療法学科 学科長）

馬目 雪枝（言語聴覚療法学科 副学科長）

記録：樋口 豊朗（事務局 教務課主任）

1. 学科長挨拶

平成27年度の本委員会において、早期の見学実習の導入に向けて議論が行われた。その結果、本年度に見学実習が実現、改善点を含めた今後の展開について意見交換を行うのが、本日の委員会の趣旨。

2. (意見交換)

馬目：早期の現場見学という事で、小児分野については6月、成人分野は8月に実施。学生はそれぞれの分野での知識は皆無である状態での見学であったが、職業理解という点で、非常に参考になったと思う。

田村：小児分野においては、現場ではSTだけでなく、様々な職種の方が携わっているという事を実感できたと思う。また、本校の学生は社会人を経験している方が多いので、見学する際に、施設側に対しても色々配慮してくれていた。改善点は特にない。

園田：成人分野においては、見学内容としては患者とその家族の許容範囲も限られているが、一部訓練において見学を実施した。本校の学生は最後の見送りに同行してくれる等、患者に対する配慮もできていた。

入学後早期の時期という事もあり、失語症の患者と会ったのが初めてで、学生自身コミュニケーションの取り方にとまどっていた。よって、最低限の挨拶しか出来なかったと反省する学生もいた。

本格的な言語聴覚士を目指すのであれば、もう少し勉強をした後に見学に来ると、また違った成果が得られると思う。

内藤：学生のとまどいは、非常に価値のあるもの。当時はわからなくても、後々再度勉強の成果（進歩状況）を確認できる場を設ける事が今後の課題。

園田：現場では、例えば病院勤務をしていたSTの職員は、グループ訓練の仕方がわからないという実情もある。1年は経験が必要、学生はなおさらである。

馬目：2年次の臨床実習の前に、もう1段階現場見学を行うのが理想。

時期としては1年次の後期（2月下旬～3月上旬）

入学後早期の見学実習→1年次のカリキュラムを終了した後に再度見学実習
→2年次の臨床実習というプログラムが現実的であり、学科の目指すところ。

田村：対象施設を絞ってはどうか？小児を希望する学生、成人を希望する学生それぞれの施設見学を行えば、少人数でお互い負担にはならない。

馬目：小児と成人に加え老健も含めた希望施設で、それぞれの現場の一日の流れを見学する事が理想。

園田：入学後早期の見学、1年終了時の見学双方を行う事で学生自身も成長を確認できる。後者の見学においては、修了後に現場STを含め、その場でフィードバックを行うのはどうか？

内藤：2年時の臨床実習では患者ではなくて、学生とバイザー（ST）同士、もしくは多職種とのコミュニケーションがうまく取れずに、実習中止になる学生もいる。終日現場を見学する事で、STの仕事、多職種との関わりをより深く知る事ができれば、その後の臨床実習に行く場合の事前教育に繋がる。正に本校の望むプログラムである。

本委員会の趣旨とは異なるが、このような現場見学が卒後プログラムでも行えば理想。

園田：現場でも、講演会を催す等、ST同士が集まり意見交換の場を設けている。

田村：1年終了時の見学実習はいつから始めるのか？

馬目：実施方法を取りまとめ、平成29年度からの実施が理想

田村：学校側から見学実習の目的と施設に対する希望等、中身をもう少し議論したい。

内藤：平成28年度第二回目の本委員会で引き続き、1年終了時の見学実習の実施方法について検証することとする。

(まとめ)

- 平成 27 年度本委員会で議論された、学生の入学早期の見学実習について平成 28 年度実施、今後も継続して行う。
- 上記見学実習とは別に 1 年終了時に再度見学実習を行う。
学生の希望（成人・小児・老健）の施設に絞り込む。
- 第二回の本委員会場で、目的・施設への希望を含めた学校としてのスタンスを検証する。